



Title	1960年1月の安保条約改定時の朝鮮半島有事の際の戦闘作戦行動に関する「密約」に係る調査関連文書No.4(97 外務省外交史料館レファレンス番号 : H222067)
Author(s)	-
Citation	平成22年度外交記録公開(3)No.5 公開日 : 平成22年12月22日 外務省外交史料館管理番号 : 2010-6440 CD・DVD番号 : H22-013
Issue Date	
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/43880
Rights	外務省外交史料館所蔵資料

C

C



97

極 秘
無 期 限
10 部の内
7 号

1 在沖縄米軍の戦路上の役割りについて

4 2 5 7
北 米 局

在沖縄米軍戦力の役割りを、(1)全面核戦争抑止戦路における役割り、(2)局地戦用強進基地としての役割り、(3)補給、中継、訓練基地としての役割り及び(4)防衛基地としての役割りに分けて考えれば、次のとおりである。

1 全面核戦争抑止戦路における役割り

極東における米国の核抑止力は、米本土に配備されているIIGBMならびにグアム等に基地を置くボラリス潜水艦、B-52爆撃機を主力としている。

沖縄にあるメースBは旧式化しており、また、F105戦闘爆撃機は水爆搭載も可能で、現在「105分間待機」の状態にあるが、核報復攻撃を本来の任務とするものではない。

沖縄は、アジア大陸に近接して脆弱性を有するため、今後とも全面核抑止力強進基地と

して使用される可能性は少ない。全面核戦争抑止力との関連では、(1)グアム等を基地とするB-52に対する空中給油のためのKC-135の強進、(2)B-52の台風避避等のための代替基地(年間20回程度)等補助的な役割りを果たすに止まるものと考えられるが、米側としてはかかる役割りを重視している。

2 局地戦用強進基地としての役割り

極東における米軍の地上戦力は韓国等におけるものを除き、ほとんど各目的の素のとなつているため、沖縄に戦闘即応部隊を配備して、緊急の際にそなえる必要があるものと考えられる。

ヴェトナム戦争に関しても、沖縄にあつた第3海兵師団が最初の進駐地上部隊となり、その後も第9海兵旅団が沖縄で戦闘即応態勢にある。また空軍のF105戦闘爆撃機、海兵隊のKC-130輸送機等も、沖縄を基地としてヴェトナムでの地上部隊支援、北爆、

補給品投下等に従事している模様である。

エ 補給、中継、訓練基地としての役割

グイエトナム戦争との関係では、沖縄のこの面での役割が最も重要であり、現在兵員約2000名の第2兵站部隊が沖縄における補給、中継活動の中心となつている。

グイエトナムで消費される軍用物資月間40～50万トンのうち10～15万トンは沖縄を経由しているといわれる。その理由としては、沖縄まで大型船で輸送した後、航空機、五五車等に換えてグイエトナムに輸送することが、効率的であること、沖縄での補給中継施設に、電子計算機、ベルト・コンベア、コンテナ方式等仕分け、送別の機械化が完備していること、等が考えられる。

また、沖縄本島北部には、対ゲリラ戦闘訓練学校が置かれている。

補給整備は、主として本土基地で行なわれているが、沖縄においても、F-3型機等若

干の航空機、戦車等の修理が行なわれている。

カ 防衛基地としての役割

極東における防衛態勢の一環として、沖縄にあるレーダー・サイトからの情報は、府中の第5空軍司令部に供給され、また、沖縄には、ナイキ・ハーキリーズ（核弾頭装備が予想されていると考えられる）ナイキ・ホークが配備されている。

海上警備については、F-3型対潜哨戒機が配備されている。

なお、沖縄自体の防衛のための地上部隊はほとんど存在しない。